フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（2）

――ハイデガーを中心に――

竹之内　禎

【抄録】

本論文はヴィクトール・E・フランクルの思想及び彼が創始した心理療法＝ロゴセラピー（意味中心療法）におけるドイツ哲学の影響について、主にハイデガーとの関連を考察する。フランクルが取り入れたハイデガーの思想は、主に『存在と時間』で展開されている現象学及び実存思想的な論点である。ハイデガーの理解のためには、通例の邦訳である「存在」（Sein）を、マイケル・ゲルヴェンにならって「存在すること、あるということ」（＝to be）、「存在者」（das Seiende）を「存在物」（＝being）ととらえ直すことが理解の助けになる。ハイデガーにおける「存在」（あること）と「存在者」（存在物）の違い（存在論的差異）は、人間の精神作用が存在物の世界の論理（唯物論）に還元されないというフランクルの思想を基礎づけるものである。また、フランクルにおける人格としての個人による共同体と大衆の区別はハイデガーの実存と世人（das Man）の概念から理解できる。

【キーワード】

フランクル、ロゴセラピー、ハイデガー、存在、存在者、実存、世人、存在と時間

はじめに

本論文はヴィクトール・E・フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905-1997）に強い影響を与えたと見られるドイツ哲学と、彼の思想及び彼が創始した心理療法であるロゴセラピー（意味中心療法）の関連について、主にハイデガー哲学との関連を考察する。フランクルが影響を受けた主なドイツの哲学者はカント、シェーラー、ハイデガーであり、フランクルの主著『人間とは何か』での引用はシェーラー20 か所、カント 9 か所、ハイデガー6 か所の順に多い。このうちシェーラーとの関係については菅井の研究[1]で詳述されており、カントとの関連については筆者の前論文[2]で検討を行った。

3 番目に多いハイデガーは、その名を挙げての引用箇所は 6 か所であるが、フランクルはその名を挙げずとも、「現存在」、「存在論的差異」、「世界内存在」など、ハイデガー哲学に特徴的な概念を多用している。フランクルとハイデガーは生前に面識があり、お互いに理解しあう関係だったことからも、フランクル思想へのハイデガーの影響は見逃せない。

---

1 菅井保著『シェーラーからフランクルへ―哲学的人間学と生命の教育学』春風社, 2012

2 竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（1）――カントを中心に――」『比較思想・文化研究』Vol.13, 2021, pp.1-12

だが、ハイデガーは独自の術語を多用しているため、フランクルがハイデガーに依拠して展開する議論は、ハイデガーについての基本的な理解を読者に要求する。フランクルが創始した心理療法ロゴセラピーの理解を深めようとする人がつまずくのも多くはこの点にある。したがって、ハイデガー読字の術語理解をもとにフランクルの思想を明らかにすることは、思想史的な問題関心にとどまらず、苦悩する人々への支援という実践面に踏み込んで展開されるロゴセラピーの理解と普及のためにも必要な課題である。

分析対象とする文献は、フランクルの主な理論書である V･E･フランクル, 山田邦男監訳, 岡本哲雄･雨宮徹･今井伸和訳『人間とは何か　実存的精神療法』春秋社, 2011 (=Viktor Emil Frankl, *Ärztliche Seerlorge：Grundlagen der Logotherapie und Existenz-analyse, Zehn Thesen über die Person*, 11., überarbeitete Neuaufglage, Herausgegeben von Alexander Batthyany, Deuticke im Paul Zsolnay Verlag Wien, 2005）である。原著の初期バージョン（Viktor Emil Frankl, *Ärztliche Seelsorge*, 6. Aufl., 1952）の邦訳であるヴィクトール･E･フランクル, 霜山徳爾訳『死と愛　新版　ロゴセラピー入門』みすず書房, 2019 も、比較のために参照した。

フランクルが取り入れたハイデガー哲学の論点は、主に『存在と時間』で展開される議論、すなわち存在論と実存思想に関連する。以下では、ハイデガーの存在論と実存思想の論点を大きく３つにまとめた後、フランクルの主著からの引用を示してその影響を検討する。

１　ハイデガー『存在と時間』の主要概念と論点

1.1　存在論的差異――人間は単なる物ではない

ハイデガーが師事したフッサールは、自然科学が優位となってきた時代背景から、哲学の使命を考えた一人である。フッサールは、自然科学の知見が、意識に上るさまざまの事象をかなり抽象化したものであることを指摘し、意識に上るさまざまの事象のほうが先にあることを指摘し、この見方を現象学（Phenomenologie（フェノメノロギー） / phenomenology）として提唱した。

ハイデガーはこれを受け、自然科学が対象とする客観的な「事物」と、人間の意識に上る「出来事としての存在」とを分け、哲学の使命は「出来事としての存在」について明らかにすることだと考えた。

この区別は、ハイデガーの用語で言えば、「存在者（存在物）」と「存在（あるということ）」との区別である。存在者（存在物）はドイツ語でdas Seiende（ダス ザイエンデ）、英語では動名詞で being と訳される。他方、存在（あるということ）は、ドイツ語でSein（ザイン）、英語では不定詞の to be と説明される[3]。

ごく簡単に言えば「もの」と「こと」の違いである。目の前に物があり、空間的な位置を占めているといった「もの（存在者・存在物）」のあり方と、人が経験する世界がさまざまに意味づけされるという「存在（出来事）」のあり方とは、根本的に質が異なる。

---

[3] 英訳の解釈は、マイケル・ゲルヴェン著, 長谷川西涯訳『ハイデッガー『存在と時間』註解』（ちくま学芸文庫）筑摩書房, 2000 による。

物理的な存在様式は、ハイデガーの用語ではドイツ語でontisch（英語で ontic）であり、「存在的」「存在者的」と訳されている。他方、意味解釈された出来事としての存在様式はドイツ語でontologisch（英語で ontological）であり、「存在論的」と訳されている。

たとえば、「泣く」という現象を、目から塩水が流れているというふうに説明するのが、存在的（ontisch）な見方であり、出来事に悲しみを感じているというふうに説明するのが、存在論的な見方である。

この区別をハイデガーは「存在論的差異」と呼び、この質的に異なるものを混同し、泣くという現象を、塩水だけで説明しようとするような悪しき科学万能主義をハイデガーは批判する。フランクルもこの点でハイデガーに完全に依拠していると見られる。

なお、事物存在のあり方についても、存在論的に見ると二種類に分かれるとハイデガーは指摘する。

一つはドイツ語でVorhandensein、直訳すれば「手（Hand）の前（vor）にある存在（Sein）」ということであり、「目の前にある存在物」と言ってもよい。日本語では「眼前存在」とか、「手前存在」、英語では presence-at-hand と訳されている。ただそこにある、自分にとってよそよそしいもの、という意味合いで使われる。

もう一つはドイツ語でZuhandensein、直訳すれば「手元（zuhand）の存在（Sein）」ということであり、日本語では「手元存在」、「道具的存在」、「用具的存在」などの訳語がある。英語では readiness-to-hand である。自分の手になじんだもの、という意味合いになる。

1.2　現存在とは何者か――人間は存在の意味を問うことができる

ハイデガーは言葉に工夫を凝らす哲学者で、彼の「現存在」という語にもそのこだわりが見て取れる。「現存在」（Dasein）とは、日常的なドイツ語ではそこに（da）あるもの（sein）という程度の意味であるが、これをハイデガーは特別な術語に仕立て上げた。

ハイデガーは、「存在への問い」（それがあるとはどういうことか、という思考）が現れる場のことを「現存在」と呼んだ。要は、人間の意識のことである。「人間」と呼ぶことで、物理的、自然科学的、物としての「存在的」なとらえ方に引っ張られるのを避けるために、あえて別の語を術語化して新たに定義したと思われる。

そして、現存在とは「何か」ではなく、現存在とは「何者か」[4]（wer / who）と問うのである。このような問い方をすることによって、現存在が事物的な存在者・存在物では「ない」ことがすでに示唆されている。

つまり、要は人間の意識であるところの「出来事の意味を思考する場」である現存在とは「我々」に他ならない。その「我々」であるところの「現存在」は、単に物質的な存在ではなく、出来事の意味を解釈しながら存在する「特殊な存在者」である。

出来事の意味を思考する我々（現存在）は、その出来事の意味（存在の意味）について、

---

[4] 先行訳ではほとんどすべて「現存在とは誰か」と訳されているが、日本語として理解しにくい。ドイツ語の wer、英語の who は「何者か」という意味もあるので、「現存在とは何者か」と訳したほうが自然な日本語であろうし、問いの意味も理解されやすいだろう。

あらかじめ何らかの予感めいたものを心の中に有している。これをハイデガーは「先行理解」（Vorverständnis / preunderstanding）と呼んだ。先行理解をもとにして、出来事の意味に迫り、新たな理解を形成する。このサイクルが「解釈学的循環」（hermeneutische Zirkel / hermeneutic circle）である。

1.3　実存と大衆――存在の意味を問いつつ生きるのが人間の本来的なあり方である

ハイデガーは、現存在の「本来的」（eigentlich）なあり方と「非本来的」（uneigentlich）なあり方という区別を述べている。

現存在とは、「存在への問い」、すなわち「それがあるとはどういうことか、という思考」が現れる場で、それは要するに人間の意識のことであった。

逆に考えれば、人間の意識を「現存在＝存在への問いが現れる場」ととらえるとき、その本来的なあり方は、「存在への問い＝それがあるとはどういうことか、という思考」が作用している状態であり、逆にそのような思考が作用しておらず、日常に埋没している状態は、「存在への問いが現れる場」としては、非本来的なあり方である。

存在への問いは、その「終焉」を考えるときに先鋭化される。言い換えれば、存在の意味は存在がその意味を与えられなくなり「終わり」を迎えることまで含めて考慮される必要がある。ハイデガーにおいては存在が意味を持って開示される場が「現存在＝人間の意識」であるという定義なので、霊魂実在論の正否によらず（死後に魂や心が存在するか否かという結論にかかわりなく）、人間の「死」という出来事は、少なくとも身体を持って空間を占めるような状態での存在様式が持続しないという意味において、現存在にとっての「断絶」ないし「きわめて大きな区切り」となる。

この現存在にとってきわめて大きな区切りである死を意識する場合としない場合とでは、出来事の意味づけが大きく変わる局面がある。死を意識し、身体を持って活動できる時間が限られていることに深く思いを致すとき、価値観が変わり、取り組むべき物事の優先順位が変わることがある。

「死へと向かう存在」（Sein zum Tode）としての自覚を持って自らのあり方を意識的に描いていく姿勢を、ハイデガーは「死への先駆的決意性」（Vorlaufende Entschlossenheit zum Tode）と呼んでいる。このとき、存在の意味への問いが先鋭化され、存在の意味を問う場である現存在は「本来的」なあり方となる。それは、死を意識した「脱日常」の意識である。

逆に、死という「きわめて大きな区切り」を忘れ、意識しない生活状態であり、日常性に埋没し、現状維持の延長線上にあるあり方とも言える。これをハイデガーは、存在の意味を問うことを忘れた現存在の「非本来性」と呼ぶ。

人間の意識（現存在）が死を意識しつつ存在の意味を問うとき、現存在（存在の意味を問う場）が本来的なあり方を取っていると言える。この状態をハイデガーは「実存」（Existenz）と呼ぶ。ハイデガーが得意とする語源論によれば、実存という概念の由来は、自己を脱していく存在、すなわち「脱自存在」（Ek-sistenz）であるとも説明される。人間は自分自身の意識を場として存在の意味を問うことができる。そして、存在の意味を問うことは、自らが

死すべき存在であるという自覚に至る。現状の存在様式に終わりがあるという認識である。死すべき存在としての自覚を持ちながら、自らのあり方を決して行く、未来に向けて自己を投企（Entwurf / project）するというあり方が「実存」であり、ハイデガーの存在論の立場から見た人間の本来的なあり方である。

これに対して、存在の意味を問う場である現存在（人間の意識）が日常性に埋没しており存在の意味を問わない状態をハイデガーは「世人」（das Man）と呼び、現存在にとっての非本来的なあり方であるとする。

以上がハイデガーの実存思想の論点である。この論点のみを見れば、ハイデガーの思想は実存主義に非常に近いものがあるが、ハイデガーは自らの思想を「あくまで存在論であり、実存主義ではない」と主張している。

この「実存思想」と「実存主義」との区別は、フランクルにおいても引き継がれている。サルトルに代表される実存主義とは、この世に意味もなく不条理に投げ込まれてもがいて生きていくしかない、だから、自分自身で生き方を決断せよ（人間は自由の刑に処せられている）という発想であるのに対し、ハイデガーは人間の認識に先立ってまず「存在」があり、神秘的な「存在の呼び声」を「良心」が聞き取る、という方向へ後年議論が進展しており、フランクルもまた、「人間は実存主義者が言うように意味もなく不条理にこの世界に投げ込まれるのではなく、その意味を人間の知能では知り得ないだけで、むしろ世界は人間が理解できない汲み尽くせない意味で満たされている」と考えるのである[5]。

フランクル、ハイデガーの実存思想と、サルトルの実存主義との違いを言い換えるならば、有神論的実存思想と無神論的実存思想との区別に当てはめて解釈することもできるだろう。あるいは、存在の意味への信頼に依拠した実存思想か、存在の意味を否定した実存思想かの違いと言うべきかもしれない。サルトルにとっては、存在の根拠は無であり、吐き気がするほど徹底的に不条理なものであるが、フランクルにとって存在の根拠は、人間が知り得ないだけで確かにあると推定されるものであり、ある意味で、最終的に信頼できるものでもある。ハイデガーは、「神」や「超越」という言葉を使わないため無神論の系譜に分類する論者もいるが、ハイデガーの「存在」は神に相当する概念だと指摘する論者もある。筆者は後者に与する。というのも、フランクルの実存概念はハイデガーをストレートに引いたものであり、そのフランクルが明らかに存在の意味への信頼に依拠した実存思想の立場にあることから、フランクルが大きく依拠するハイデガーも同様に、存在の意味への信頼を持つ思想家だと考えられるためである。

なおハイデガーの「実存」と「世人」の対比は、フランクルの言葉で言うならば「人格」と「大衆」の対比として対応づけられる。そして、人格は、意味のもとで互いに尊重し合う「共同体」を形成するが、「大衆」は意味によらず、集合的な動きをする。

---

5 ハイデガーは『存在と時間』の段階では、現存在（人間の意識）が、気づいたときにはすでに世界に投げ込まれていた「世界内存在」（In-der-Welt-sein）であるとする議論を展開しており、この点だけを見るとサルトルにも近い。ただし後年のハイデガーは、上述のように「存在の呼び声」の立場に移行している。

2　ハイデガーへの言及箇所

以上の論点を踏まえた上で、フランクルの主著『人間とは何か』におけるハイデガーへの直接的な言及箇所のある 6 か所について、一つずつ見ていくこととする。

2.1　生命は唯物論では語れない

「かつて、あるギムナジウムの理科の教師が授業中に、有機体の生命は、したがって人間の生命も、「結局」一つの酸化現象、燃焼過程に「他ならない」と説明したところ、一人の生徒が突然立ち上がって、その教師に激しく食ってかかった。「それでは、いったい人生そのものにはどんな意味があるのでしょうか。」この少年は、人間という存在が、われわれの前の机上で燃え尽きていくロウソクとは異なった存在様式で実存していることを正しく理解していたのである。ロウソクの存在（ハイデッガーならば「眼前存在（Vorhanden-Sein）」〔事物存在〕と言うであろう）は燃焼過程として理解されうるであろう。しかし、人間自身は本質的にそれとは違う存在形式をもっているのである。人間存在は、何よりもまず本質的に歴史的存在であり、つねに歴史的空間の中に置かれており、この座標系から逃れることはできないのである。そしてこの関係の体系は、たとえ明白なものではないとしても、おそらく表現できない意味によってつねに規定されているのである」『人間とは何か』pp.80－81

この論点は前述の 1.1（存在論的差異――人間は単なる物ではない）に関連する。生命、あるいは人生（Leben / life）とは、物質の理論のみでは説明し尽くすことができないという直感的にも理解しやすい議論である。だが、生命体の身体部分を構成する物質の化学反応の面のみを見ようとすると、この基本的な論点を見逃してしまう。化学反応が終わって身体が機能しなくなり、死後にはただの灰となり、「死んだら終わり」であるならば、何のために人が善く生きようとするのか、そうあらねばならないのかの説明がつかない。

『フランクル回想録』で述べられているように、教師に反論したこの生徒とはフランクル自身である。このエピソードは、フランクルの生涯をかけた「唯物論との戦い」の幕開けであった。ギムナジウムの生徒だったフランクルの疑問・反論は、ハイデガーの哲学によってその後、物と人間との「存在論的差異」（1.1 参照）として理論的に補強される。

この論点は、本質的には、現代哲学の一大論点ともなっている。すなわち、フッサールが現象学を提唱するまで、自然科学の理論に基づいて事象を説明することが学問的に正しいと考えられる傾向があり、現代でもその影響は続いている。現象学は、人の思考が加わった科学の目よりも先に、人の意識に上ってくる世界像があるはずで、それが認識の根源であり学問のスタート地点であるべきだと考える。科学の理論は間主観性の上に成立するもので、暫定的に通用する仮定の理論にすぎないとも言える。

なお、ここではロウソクが燃え尽きて消えるもの、人間の本質とは異なる物質的な存在の例として挙げられているが、別の箇所で、フランクルは松明を使った譬えを人間の精神的な

面を表す比喩として用いているので、類似の例を用いて異なる論点を説明していることに注意が必要である[6]。

2.2　人間の認識力を超えた意味の世界がある

「すでにパスカルは、枝は樹木全体の意味を決して捉えることができないと述べている。また最近の生物学的な環境論は、どんな生物も、その種固有の環界（ウムヴェルト）〔環境世界〕に閉じこめられており、それを打ち破ることはできないことを示した。たとえ人間がこの点において極めて例外的な位置を占め、きわめて「世界開放的」であり、環界以上のものをもち、「世界を持つ」（マックス・シェーラー）――世界「というもの」を持つ――のだとしても、この人間の世界の彼岸に超世界（Über-Welt）が存在しないなどと誰が言いうるであろうか。

むしろ、次のように考える方が自然ではないだろうか。すなわち、人間が世界の最高位に立っているというのは見かけだけのことであり、自然の内部で動物に比べてより高い所に立っているにすぎないのだ、と。そして「世界内存在」（ハイデッガー）についても、結局、動物の環界と同じようなことが言えるのではないだろうか。動物が環界から出て、その上位にある人間の世界を理解できないのとまったく同様に、人間も、たとえ超世界を信仰によって予感的に感じとることはあっても、それを明瞭に理解することはできないであろう。家畜化された動物は、人間が、自分を働かせる目的を知らない。人間も、自分の人生にどんな「最終目的」があるのか、全体としての世界にどんな「超意味」があるのか、をどうして知ることができようか」『人間とは何か』pp.86－87

この論点は前述の 1.2（現存在とは何者か――人間は存在の意味を問うことができる）に関連する。

ハイデガーは、存在をその場に映し出すものとして人間の意識をとらえ直し、これを「Dasein」（現存在）と呼んだ。現存在は、別の特徴から呼び直すならば、「世界内存在」（In-der-Welt-sein）でもある。これは、人が何かを意識したときには、すでにその世界に投げ込まれた後である、ということを表す概念である。

前述のように、サルトルはこれを不条理に世界に投げ込まれた状態と考えたのに対して、フランクルは、人間の有限な知性では不条理としか思われない事象にも、人間の知性を超えた意味（Übersinn / super meaning）がその背後にあると考える。この人間の知性を超えた

---

6 「一本の松明(たいまつ)が消えたとしても、それが輝いたということには意味がある。しかし、火のついていない松明リレーをいくら永遠に（果てしなく）続けたとしても、それには意味がない。ヴィルトガンス〔Anton Wildgans, 1881-1932 オーストリアの詩人、劇作家〕は「輝くべきものは、燃えることに耐えなければならない」と言ったが、この「燃える」とはおそらく苦悩することを意味しているであろう。そして、われわれはさらに、それが燃え－尽きること、「最後まで」燃えることに耐えなければならない、と言うことができるであろう」『人間とは何か』pp.151－152

超意味の世界を、フランクルは「超世界」（Über-Welt）と呼んでいる。超世界は、その定義からして、人間の知性では明確にとらえられず、人間にとって不条理としか思われない事象について、最終的な意味づけがなされる場であり、「信仰によって予感的に感じとることはあっても、それを明瞭に理解することはできない」ものと想定されている。

信仰という言葉は宗派宗教的な色彩を持つが、フランクルに思想的に近いヤスパースは著書『哲学的信仰』の中で、哲学すなわち理性の観点からの信仰があることを述べている[7]。哲学的信仰は、キリスト教のような啓示信仰ではなく、人間が自己の直面する事象のうちに超越者の暗号ないし暗示と思われるものを読み取る思惟によって意味を感得することで、「実存にとって、超越者が「いま」「ここ」において生き生きと覚知される」ということであるが、フランクルが言うように、それは、人間にとって「信仰によって予感的に感じとることはあっても、それを明瞭に理解することはできない」ような意味である。ヤスパースもフランクルに影響を与えたドイツ哲学者の一人であるが、本論文の主題であるハイデガーからフランクルへの影響という枠を若干超えるので、別の機会に詳細に論じることとする。

2.3　人と世界を尊重した意味実現の方向に幸福がある

「喜びそのものは、喜びとしては志向されえない。喜びは「遂行現実」（ライアー）であり、ただ価値認識的な行為を遂行することのうちにのみ、つまり価値把握という志向的行為の遂行のうちにのみ実現されうるのである（3）。このことをキルケゴールは美しくも、幸福に入る扉は外側に向かって開く、と述べている。この扉は、それを押して開けようとする者には閉じられるのである。無理やりに幸福になろうと努める者は、まさにそのことによって幸福への道を自分自身ですでに塞いでしまっているのである。」『人間とは何か』p.100

「［原注］（３）この行為の遂行そのもの（「遂行現実」）のうちに人格の本来的存在があるのであるが、これに対立する非本来的存在として、次の三つのあり方がある。第一――「眼前存在」〔Vorhandensen 事物存在〕（伝統的様式としての――ハイデッガー）、第二――状態的なものに固執する存在。それゆえ状態的なものを超えた存在を志向しない。第三――自己自身を志向する自己反省的存在。まさにこのことによって自己を単なる眼前存在に格下げする（実存的に「決断する」存在、「現」－存在を、自己観察によって、単なる事実的存在に貶める）。」『人間とは何か』p.353

この箇所は、簡単に言えば「無理に幸福になろうとしても、かえって幸福を逃してしまう」ということである。ここでキルケゴールの言葉として引用されている「幸福に入る扉は外に向かって開く」の原文はそのままの形では見つからないが、キルケゴール『あれか、これか』第一部に以下のような表現がある。

---

7 羽入佐和子「ヤスパースの「哲学的信仰」について―暗号(Chiffer)とマーヤー(maya)の解釈を手がかりとして」『比較思想研究』第 16 号, 1989, pp.74－80

> Alas, fortune's door does not open inward so that one can push it open by rushing at it; but it opens outward, and therefore one can do nothing about it.[8)]
> 悲しいかな、幸運のドアは、無理やり押し入れば内側に開かれるというものではないのだ。否、それは内側から外側に開かれるのであり、それについて、こちらから手出しすることは全くできないのである。（竹之内訳）

つまり、幸福につながる条件（意味あること）を遂行していくことによって、結果として幸福が後からついてくるのであり（ちょうど犬の進む方向にしっぽがついてくるように）、直接に幸福を求めて押し進んでも、犬が自分のしっぽを追い回してたどりつけないように、幸福にたどりつくことはできない。

この議論の注記の中にハイデガーの概念が登場する。「本来的」「非本来的」「眼前存在」「「現」－存在」「実存」「事実的存在」がそれである。これらの論点は、前述の 1.3（実存と大衆――存在の意味を問いつつ生きるのが人間の本来的なあり方である）の論点に関連する。

ハイデガーにおいて、現存在（人間の意識）とは、存在の意味を問う場であった。人間が意味の実現のための行為を遂行することは存在の意味を満たすことであるため、現存在の「本来的」なあり方であり、これに対して「非本来的」なあり方は、世界や他人を単なる事物として見たり（第一）、現状から脱却せず事なかれ主義でいたり（第二）、自己さえも事物化して何らかの外面的要素で説明しようとしたり（第三）することである。すなわち、人間を単なる物のように見て、未来志向の発想、生きる意味を問う姿勢を放棄した状態である。ハイデガーにおいては、本来性／非本来性の区別は、存在の意味を問う場としてのあり方の差であったが、フランクルはもう一歩を進め、このような非本来的なあり方では幸福からも遠ざかる、と主張しているのである。

本来的なあり方はこの逆なので、世界や他人を単なる事物としてではなく、唯一無二の機会や人格として見ること（第一）、現状を更新する意志を持つこと（第二）、自己自身を外面的要素で評価せず、実存的に「決断する存在」であると自覚すること（第三）が真の幸福につながる、と解釈することもできるだろう。

2.4　人間は自ら決断する能力を持ち、その責任を負うべき存在である

> 「人間存在は、自由存在であるがゆえに、責任存在である。人間存在は、ヤスパースのいうように、彼があるところのものをそのつどまず決心する存在、つまり「決断する存在」である。彼はまさに「現存在」であって、単なる「眼前存在（Vorhanden-Sein）」〔事物存在〕（ハイデッガー）ではない。私の前にあるテーブルは、少なくともそれ自身では、すなわち人間によって動かされないならば、今のままそこにありつづける。と

[8] Søren Kierkegaard, “Diapsalmata,” in pt. 1 of *Either/Or*, trans. and eds. Howard V. Hong and Edna H. Hong (Princeton: Princeton University Press, 1987), 23.

ころが、このテーブルで私と向かい合っている人間は、次の瞬間に彼が「ある」ところのもの、たとえば次の瞬間に私に話しかけるのか、それとも黙ったままでいるのかを、そのつど決断している。人間は、彼が有する多様な可能性の中から、つねに一つの可能性だけをその存在において実現する。このことは人間存在そのものの際立った特徴をなしている（この際立った特徴をもつ人間の存在は実存と呼ばれているが、また「私である存在」と呼ばれてもよいであろう）」『人間とは何か』pp. 161－162

この箇所は、人間の本質を「〇〇存在」と形容する表現が列挙されている。ヤスパースの「決断する存在」という概念を引きつつ、ハイデガー哲学をそのまま解説したような内容となっている。ハイデガーに関連するキーワードは「現存在」、「眼前存在」＝「事物存在」、「実存」であり、内容は本論文 1.1 と 1.3 に述べた通りである。

なお、冒頭の「自由存在」「責任存在」とは、フランクル自身の用語である。自由に決断することができる存在であることは、同時に、その決断に対して責任を持つ存在であることでもある。フランクルは常に自由と責任を対に論じており、アメリカ東海岸に「自由の女神」の像があるので、西海岸には「責任の女神」の像を置いてはどうか、などと提案している。このような自由と対になった「責任性」を強調する点、人間を「責任存在」と見る点は他の実存思想よりもフランクル思想に特徴的な点である。

2.5　人間の非事物性――唯物論批判

以下の引用においては、原注（10）が付されているので一緒に掲載する。

「ここで、シェーラーとハイデッガー以後、人格的ないし実存的に方向づけられた精神療法が、その「人間学的志向」(10) に従ってフロイトを超えていった歩みは今どのような状態になっているかという問題について考えることにしよう。この場合、われわれは、フロイトの精神療法に対する根本的な貢献、すなわち精神分析固有の業績から出発せねばならない。その固有の業績とは、神経症に対する一つの「省察」である。すなわち、フロイト依頼、神経症は、ともかくも何らかの意味深いものとして解釈されるようになったということである」「しかしながら（中略）精神分析は、いわゆる「審級の人格化」を行う程度に応じて、患者を非人格化する。結局、そのような人間像の枠内では、人間はもの化（reifizieren）されるのである」『人間とは何か』p.390

「[原注] (10) Paul Polak, Existenz und Liebe: Ein kritischer Beitrag zur ontologischen Grundlegung der medizinischen Antropologie durch die »Daseinsanalyse« Binswangers und die »Existenzanalyse« Frankls, *Jahrbuch für Psychologie und Psychotherapie* I. 355, 1953.」『人間とは何か』p.415

「人間がもの化されること、つまり、ヴィリアム・シュテルンの人格論における対句を使って言えば「人格」が「事物（ザッヘ）」化されることは、一つの過程の一方の側面にすぎない。もう一方の側面は、人間は操作される、というように表現できる。言い換えれば、人間は、

事物にされるだけではなく、目的のための単なる手段にもされるのである」『人間とは何か』p.390

簡単に言うと、フロイトの精神分析学の理論は、今まで医学の対象としてまともに研究されてこなかった神経症患者について、新たな理論を立ち上げてアプローチしたという点で功績があったけれども、その理論は人間を欲望のシステムでできた物のように見る見方に通じるので、また別の悪しき方向に向かってしまった、という批判である。

ここではフロイトの精神分析学における「審級」(Instanz) という概念に言及されている。「審級」とは事象の価値を判定する心的装置のような意味である。フロイトは心の作用を、エス（動物本能的・欲動的な無意識)、超自我（後天的な道徳的意識）と、両者を調停する自我の３つに分類して考えた。そして、エスの力が根源的で、巨大であることを主張した。フロイトの精神分析学の見方では、人間は心的な装置で動く自動機械のようなものであり、そこでは自我や超自我は軽視され、人格を尊重する論拠もない。このような「人格」の価値を無視した人間観は、人を何かの目的のための手段としてのみ見る見方につながると同時に、心を病んだ人々や劣等人種と分類された人々を「不良品」として「処分」しようとしたナチスと同質の行動原理にも容易に展開しうる。

これに対し、フランクルは無意識の領域の大なることを認めつつ、人間の無意識は、動物本能的な欲動というよりも、理性的で高度な知恵が潜んでいる「識られざる神」の領域だと考えた。これは、唯物論に帰着するフロイト的な人間観と、心身の作用に対する人間精神の優位を主張するフランクルの人間観との主要な対立点である。

ここでシェーラーとハイデガーに言及されるのは、彼らが、「人間は物ではない」という論点を明確にしていることによる。すなわち 1.1 で述べた論点が関係する。

なお「人間は、事物にされるだけではなく、目的のための単なる手段にもされる」という指摘は、ハイデガーの「人間は物ではない」という論点が、カントの「人格は目的のための単なる手段としてのみ扱われてはならない」という論点につながっていることを示唆するものでもある。

2.6　「意味への意志」の哲学的位置づけ

人間が「意味への意志」を持つということは、フランクル思想及びロゴセラピーにおける中心的な論点である。

「意味への意志」の哲学的位置づけに関わる下記の箇所では、「アプリオリ（カント)」と「実存疇（ハイデッガー)」の後に、本文中に〔　〕に括られた長めの訳注が付されている。

「さて、この意味への意志に関して言えば、それは不可欠の前提であり、「意味を意志する」こと以外われわれは何もできない。この意味において、意味への意志は超越論的であり、アプリオリ（カント）〔経験に先立つ、あるいは経験に由来しないという意味。超越論的とは、経験の成立する条件として、そのようなアプリオリ（カント）性を認める考え方をいう。『カント事典』弘文堂、

参照〕なものである。あるいは、意味への意志は実存疇（ハイデッガー）〔実存疇は、ハイデッガーが『存在と時間』で「現存在の存在諸性格」をあらわす規程一般に与えた術語。現存在の存在である実存の構造を規定する概念の総称であり、「実存論的表現」、「実存論的概念」とも言い換えられる。実存疇はまず、「存在的」（ontisch）から区別された意味で「存在論的」（ontologisch）であるような規定をさすが、さらに、同じく存在論的規定でありながら現存在以外の存在者の存在を規定する「用具存在性」や「客体存在性」といった「範疇」と区別される。『現象学事典』弘文堂、参照〕である。われわれは、やっとのことで意味を見出したと思うまで、とにかく「意味を探し求め」ざるをえない。そういう意味で、意味への意志は人間の条件に組み込まれているのである」『人間とは何か』p.413

簡単に言えば、意味あることを求めようとする姿勢こそ、人が生まれながらに備えている性質であり、それは、ハイデガーが人間の本質として考えたものとも一致する、というのである。

カントについては既出の論文[9]で論じたので、ここではハイデガーの部分のみを検討する。

ハイデガーは、人間の意識が持つ「存在の意味を問う場」という特徴的な機能に注目し、これを「現存在」と呼んだことはすでに述べた。そして存在の意味を求める姿勢が現存在の本来的なあり方である。この「存在の意味を求める本来的なあり方」をハイデガーは「実存」と呼んだ。それは、他の事物的存在や道具として使われる存在とは異なり、世界に置かれた意味を問う存在であり、未来に向けて決断する存在である。そうした「実存」の性格を表す表現ないし諸概念が「実存疇」（Existenzialien）であり、「実存範疇」「実存論的カテゴリー」などとも訳されている。

フランクルは、人が意味を求める姿勢、すなわち彼が「意味への意志」（Wille zum Sinn / will to meaning）と名付けたものは、存在の意味を問う「実存」の意識と不可分であり、人間を特徴づける概念の一つであると、ここで宣言したのである。

まとめ

本論文では、フランクル思想及びロゴセラピーにおけるハイデガー哲学の影響について検討した。すべての引用箇所において、フランクルがハイデガーの存在論に完全に依拠していることが確認できた。ただし、1.3 で指摘したように、有神論的実存主義と無神論的実存主義との違いに注意が必要である。フランクルは明らかに前者であり、ハイデガーもまた、その思想全体を通じてみると後者に近い。

ハイデガーは伝統的、日常的な用語による先入観を排した独自の思想を展開することに拘ったため、一見すると理解のハードルが高い表現になっているが、言語への拘りは同時に語の二重解釈などドイツ語表現の巧みさとしても現れており、その点も言語の二重解釈を好むフランクルに多くの示唆を与えているものと思われる。

---

9 竹之内禎「フランクル思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（2）――カントを中心に――」『比較思想・文化研究』Vol.13, pp.1-12

フランクルがハイデガーと面会した後、ハイデガーが記念に Das Vergangene geht, das Gewesene kommt.（過ぎしものは去り、成りしものが現れる）という言葉をフランクルに書き残したという（『フランクル回想録』）。出来事は過ぎ去っていくが、そこで成し遂げた事実は生きた証として残り続ける。フランクルはここにも彼我の思想の一致を見た。

こうした今回取り上げなかった論点については、他の機会に検討を行いたい。

The influence of German philosophy on Frankl's thought and logotherapy (2) Focusing on Heidegger

Tadashi TAKENOUCHI

Abstract

This paper mainly considers the influence of German philosophy on Viktor E. Frankl's thought and logotherapy which he founded as meaning-centered psychotherapy, especially focusing on the influence of Heidegger's philosophy. The issues of Heidegger's philosophy adopted by Frankl are mainly related to phenomenological and ontological viewpoints in Heidegger's main work "Sein und Zeit" (Time and Being). Based on M. Gelven, we can regard "Sein" as "to be" and "das Seiende" as "being". This ontological difference is the basis of Frankl's thought that human spirit cannot be reduced to materialism. In adittion, Frankl's idea of "Gemeinschaft" (community) and "Masse" (mass) can be understood by Heidegger's idea of "Existenz" (existenz) and "das Man" (the one or they self).

keyword

Frankl / logotherapy / Heidegger / Sein / Seiende / Existenz / das Man / Sein und Zeit